2010年（平成22年）
第25号
（1月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

２０１０年、平和元年　新たな出発の年に

渉外部長　宮地　啓安

新年あけましておめでとうございます。昨年は、京都教会発足５０周年という記念の年を、各界の皆様方のご支援を賜り、非常に充実した一年になったことを改めて感謝申し上げます。

そして、今年は５１年目に入ります。京都教会は新たな第一歩を踏み出します。

また、今年は九星では八白の年、干支は寅年です。そして、本会が昭和１３年に創立したのも、八白寅年です。創立７２周年の教団も創立の精神を基に再出発する時といえます。このように二重の意味で、私たち京都教会は新たな出発の年を迎えたことになります。

一方、日本経済は一昨年の世界同時不況から脱却できず、景気低迷が続いています。日本を代表する経営者は、今年の秋か冬頃から景気が回復すると見ています。いったん底を打った日本経済もこれから立て直しに入る段階に入ったといえるでしょう。

また、政治の世界では今年の４月に京都府知事選挙、７月に参議院議員選挙があります。さまざまな問題を抱える現在だからこそ、私たち一人ひとりは政治に関心を持ち、選挙で必ず一票を投じることが必要です。一人ひとりが責任をもって、京都府や日本の将来の方向を決めるという意識で望みたいものです。

片や世界では、深刻さが広がりつつある地球温暖化問題。地球砂漠化による食料不足問題。未だに驚異の衰えない核兵器や軍事力の問題。依然多くの難問を抱えています。

本会創立の目的は、法華経に説かれた真理の教えを身につけ、人々を幸せに導き、不安のない平和な社会・世界を築くことにあります。

この目的に沿って、今年は軍縮に向けた機運を盛り上げるため「ＡＲＭＳ　ＤＯＷＮ（アームズダウン）」と称した全世界５０００万人の軍縮署名活動（２面に関連）を実施します。また、会員一人ひとりが地球温暖化防止に向けた生活改善活動を推進します。

京都教会の新たな第一歩は、まず一人ひとりが平和に向けた行動を起こし、家庭から地域・日本そして世界中に広げていけるように取り組んでまいります。

合掌

ゆめポッケ

●ゆめポッケ３万９１７０個　紛争地の子供たちへ

昨年の「ゆめポッケ」で各教会から寄せられた３万９１７０個のポッケの配布先がこのほど決定した。

昨年６月１日から８月３１日まで、全国各教会において、小・中学生が中心となりポッケ作りを行った。各家庭では、親子で話し合いながら、紛争や対立で傷ついた世界の子供たちを勇気づけることを願い、おもちゃや文房具などを詰めた。

全国から集められたポッケを、ブロックごとに以下の配布先、協力団体に送られた。この「ポッケ」で世界の子供たちの笑顔が少しでも増えることを願う。

（以下、配布先の国・地域／協力団体）

- 静岡、北陸、南九州→アゼルバイジャン／ハイヤット
- 神奈川、山口→アフガニスタン／ジェン
- 東京中央、西九州、南九州、ロサンゼルス教会→フィリピン／ＭＣＬ（ミンダナオ子ども図書館）
- 奥羽、北関東、東京東、甲信、三岐、**近畿**→レバノン／ＮＩＳＣＶＴ（社会福祉と職業訓練のための全国協会）
- 東北、福島、中国、四国、北九州→レバノン／ＵＮＲＷＡ（国連パレスチナ難民救済事業機関）
- 北海道、茨城、千葉、東京西、多摩、愛知→パレスチナ自治区（ガザ）／ＵＮＲＷＡ
- 北海道、新潟、埼玉→パレスチナ自治区（ヨルダン川西岸）／ＵＮＲＷＡ

時事刻々

２０１０年に団塊の世代の人たちがみんな還暦を迎える。つまり、昭和２０年から２５年生まれの人たちである。

団塊の世代の人たちは、戦後の日本を作り上げた人たちだ。団塊の世代は大衆として、大量生産大量消費時代を生み出した。

特に男性は、学校や会社では競争社会を生き抜き、マイホーム、マイカーを実現することを目標に頑張った世代だ。

還暦を間近にしたサラリーマンは、役職を外され給与は大幅ダウン。家庭では粗大ごみと言われ、地域に知り合いもないという、寂寥感に見舞われる人が多いという。

落語にご隠居さんがよく登場する。人のいい、近所のもめごとを調整するという役柄だ。現役時代に積んだ豊富な経験が活かされている。

今までは「会社人間」だった団塊の世代が、これからは、地域社会に貢献できる「社会人間」になってもらいたい。

ブロック！地球温暖化－エコキャップ運動

１９９７年の第３回気候変動枠組み条約締約国会議で京都議定書が採択されて以来、多くの方が地球環境に関心を持つようになり、ＣＯ２削減に対してさまざまな取り組みがなされている。これに対して一般市民が、誰でもいつでも取り組める活動としてエコキャップ運動がある。

現在、日本でペットボトルは年間２，５００億本生産され、回収率は６７％、再資源化率は３７％しかない。再資源化率が低いのは、キャップやラベルが付いたままのペットボトルは焼却処分にまわされるためだ。ペットボトルからキャップを外し、ラベルを剥がすことペットボトル再資源化が促進される。当然、省資源、環境対策にも役立つ。

また、この運動は回収されたキャップをリサイクル事業者に売却し、この売却益をＪＣＶ（世界の子どもにワクチンを日本委員会）に寄付し、ポリオワクチンを世界の発展途上国の子供に送られる。ワクチンさえあれば助かる子供が世界には１日６，０００人いると言われている。

キャップを回収することにより、ペットボトルの再資源化を促進し**「ＣＯ２削減」**を目指し、またキャップの再資源化で得た売却益をもって**「世界の子供たちにワクチンをおくる」**ことで世界の子供と地球の未来を守る運動がエコキャップ運動だ。

すでに本会の各教会や明社などでこの運動に参加しているところもある。そこで、今年から、京都教会においても身近な環境問題への取り組みとして、多くの方とともに活動を展開する予定だ。

ＡＲＭＳ　ＤＯＷＮ！　～共にすべてのいのちを守るためのキャンペーン～

世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）、ＷＣＲＰグローバル・ユースネットワークは、全世界共通署名キャンペーンを始めた。このキャンペーンは「①核兵器の廃絶②クラスター爆弾や地雷などの通常兵器の増産・誤用の停止③全世界の軍事費の１０％を国連ミレニアム開発目標達成のために使用」を目的としている。

全世界の宗教青年が中心となり、世界中で５０００万人の署名を集め、国連事務総長、国連安全保障理事会常任理事国、各国の国家元首・国会議員に提出することを目標とし、昨年１２月３日から今年の９月２５日までを期間としてスタートした。

ストックホルム国際平和研究所によると２００８年の軍事費は過去１０年で４５％以上増加し、約１４０億円に達した。西・中欧州を除けば、１９９９年からすべての地域において軍事費が増加している。

一方、２００５年に発表された「国連ミレニアム・プロジェクト」の報告書「開発に投資する：ミレニアム開発目標（MDGs）達成のための実践的行動計画」の中で、この目標を達成するためには、年間（２００６年時点）で約１３兆円の開発援助が必要であると報告されている。このことから、軍事費の１０％を国連ミレニアム・プロジェクトの開発援助に充当することを目的とした。

ＷＣＲＰグローバル・ユースネットワークは２００６年、京都で開催されたＷＣＲＰの「第８回世界大会」に先立ち、広島で開催された「ＷＣＲＰ青年世界大会」を機に新たに組織された青年宗教者による国際的なネットワーク。ＷＣＲＰ日本委員会青年部会もこのネットワークに属している。

（ｗｗｗ．ａｒｍｓｄｏｗｎ．ｏｒｇ／ｊｐ／参照）

京都教会においても、青年部が中心となりＡＲＭＳ　ＤＯＷＮ！キャンペーンを推進していく計画だ。

今後「平安月報」において、ＡＲＭＳ　ＤＯＷＮ！キャンペーンの実施状況を順次レポートする。

他教団活動紹介　（中外日報１月９日より）

●マンガで知る臨済宗

臨済宗の僧侶はどのような修行を行い、どのような日常生活を送っているのか。それをユーモアたっぷりにマンガで解説する本が出版された。東日本の、とある臨済宗寺院の寺族・杜康潤さん著になる『坊主ＤＡＹＳ』である。僧堂での修行生活や寺院の日常を紹介している。コミカルな絵柄と内容には、仏教をあまり知らない一般の人も引き込まれてしまうのだろう。

私たち kinki.genki（きんきドットげんき）

今年からの新コーナー。今後、近畿ブロックのホームページから最新のニュースをお届けする予定。現在、ホームページのリニューアルを進めている最中だ。もうしばらくお待ち頂きたい。また毎月、中村教会長の修行目標を携帯からも見ることが出来る。右の URL を携帯で取り込んでアクセス。修行精進の指針として頂きたい。

２００９年に京都教会は発足５０周年を迎えました。２０１０年私たちは新たな一歩を踏み出します。

第３０回普門合唱フェスティバルを開催

『広げよう・仏教讃歌の輪』をテーマに「第３０回普門合唱フェスティバル」（佼成文化協会主催）が昨年１１月２９日、普門館で開催された。佼成合唱団をはじめ全国各教会から３５団体が出演。会員ら２２００人が来場した。京都教会からも初めて参加した。

文化活動

立正佼成会の様々な文化活動に佼成雅楽会がある。本会の開祖が日本古来の伝統文化と、立正佼成会の儀式儀礼の荘厳さをより大切にしたいとの思いから、昭和２５年に元宮内庁楽部の楽長を務められた多宏朝先生を講師に迎え設立された。

雅楽とは千年以上続く日本古来の踊りや、アジア大陸から渡来した音楽と舞が平安時代に融合され、現在では現存する合奏音楽としては世界最古とされている。京都教会から４名が佼成雅楽会の講師より、笙・篳篥（ひちりき、たて笛）・龍笛（横笛）を昨年より勉強し、練習に励んでいる。

佼成会のことば（行法ガイドブックより）

●日々ありがとうございます

会員同士が顔をあわせると、「日々ありがとうございます」と言って合掌してきました。私たちはこの世に生を受け、『法華経』という尊い教えにご縁を頂いていますが、それも目に見えない多くの人やもののお陰があるからです。また、私たちは両親をはじめご先祖、さらには人類発生以前からのいのちを受け継いでいるのです。そのことに思いをはせると、こうして生かされていることに感謝の心がふつふつと湧いてきて、自然と出会った人に合掌できるようになるのです。

中には「感謝の心がないのにやってもしようがない」と言う人がいると思いますが、形から入ることも大変大事なのです。心が伴わなくても常に口に出してみる。それによってだんだんと意味がわかってきて、こうして生きている自分が当たり前と思っていたのが、目に見えない人やものに対して恩を感じる心に変わってきます。そして、お互いに仏性を礼拝し合うという素晴らしい世界が開けてくるのです。

仏教を生活に生かす　「日常生活の中の仏さまの教え」

《一点の明かり窓・・・仏性礼拝》

【人の「仏性を拝み出す」ことこそ、菩薩行の大眼目なのです。そこに生きた仏教があるのです】

庭野開祖は「すべての人に仏性があると信じ、人さまとのふれあいの中に、お互いの仏性のあたたかな通い合いが見出せるような眼を持つこと、それが仏性を礼拝することです」と、教えて下さいました。

仏性を礼拝するというのは、人をそのまま礼拝すること、尊敬することです。**「いま、目の前にいる人は、自分を成長させてくれ、菩薩行をさせてく下さる人だ」**と心から思い、合掌することで、自分だけでなく、相手も仏性に気づけるよう、仏さまの光をあてるご縁になっていくことです。

相手を尊敬している人の言葉というのはあたたかいものです。そのあたたかさが、人に希望と喜びと安心を与え、心のよりどころをつくります。

【人の仏性を拝むことが、仏道修行の根本であり、すべてに先行するものでなければならぬということなのです】

ある時、出張でお役を終え、宿に戻られた庭野開祖に「さぞお疲れであろう」と、秘書が指圧師を呼んだそうです。指圧師が到着したちょうどその時、庭野開祖に電話がかかってきました。「君も疲れているんだから」とうながされ、秘書が先に指圧を受けることになりました。

指圧が始まると「しまった」と思いました。下手だったのです。料金も払いたくない気分でした。でも、今さら断るわけにもいかず、とうとう庭野開祖の番になりました。申し訳ないと思いながら眺めていると、どうも自分の時とは様子が違います。

庭野開祖は、指圧が腰のあたりまでくると、**「もう少し下の方がいいなあ。そう、そこそこ。もうちょっと力を入れて。うん、効くよ。あんたは上手だねえ」**と、褒めておられます。

褒められた指圧師は庭野開祖の指示に従って一生懸命に治療していました。普通よりも倍の時間をかけて指圧が終わると、指圧師は「私はまだ修行の足りない、見習い中の者です。今日は色々と教えて頂いて本当に勉強になりました。有難うございました」と頭を下げ、料金を受け取ろうとしません。

ところが、庭野開祖は「いや、今日はいい指圧をしてもらった」と喜んで、料金もはずんで包まれました。秘書は喜んで支払うその姿に、どんな出会いの中でも相手を拝み、拝むことによって人を生かす庭野開祖の大きさをあらためて深く感じたそうです。

【人間を拝めばいいのです。仏性を拝めばいいのです】

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《マザー・テレサのこと》

第１回アジア宗教者平和会議は、昭和５１年１１月２５日から６日間、シンガポールの地に、アジア諸国を中心に２１ヶ国から３００人の宗教代表を集めて開かれた。第２５３世天台座主の山田恵諦師も参加して下さった。

「アジアにおける平和、安全、人間の尊厳」「新国際経済秩序と総合的国内開発」「宗教による開発事業」の３つの研究部会に分かれ、各国の宗教代表が、それぞれの国の生々しい現実をさらけ出しあって、真剣な討議が続いた。

アジアの各地に、今なお人間として生存する権利すらも奪われている人々が数多く放置されているのである。飢えて病気にさいなまれ、住む家さえない人たちが無数にいる。インドのカルカッタ施療院院長として４０年間にわたって奉仕活動を続け、ノーベル平和賞を受賞されたマザー・テレサは基調講演でこう語りかけた。

「私は、貧しい人々の中でも最も貧しい人々の代表として、この会議に出席しました。現代の世界は愛と平和に飢えています。私たちは最も貧しい人々と共に生きて、神の愛のわざを分かち合うことに努めなければなりません。貧しい人々は、私たち自身の中に愛が満ち満ちていることを教えてくれる人たちです。

私たちに必要なのは、武器でなく、愛と慈悲こそが必要なのです。自分の心の中に平和を持たない限り、神の愛を人に与えることはできません。平和は神に対する祈り、他の人への奉仕を通してのみ実現されます。

４歳の少年が、小さなびんに入った砂糖を私の所に持ってきてくれたことがありました。少年は食事の時に自分に与えられたわずかな砂糖を何日も貯めて、自分よりももっと苦しんでいる人のために差し出してくれたのです」

マザー・テレサは、３５０人のシスターと共に、朝四時から、来る日も来る日も瀕死の病人の看護にあたって、その人たちの手を握りしめて看取り、孤児の世話をするという厳しい労働に自分を捧げておられるのである。庭野開祖がいちばん心を打たれたのは、マザー・テレサの奉仕が、自分が余分に持っているものを与えるのではなく、**「ないものを与える」**奉仕であるのを教えられたことだった。

自分にないものを人に与えるのには、それを作り出す努力をしなければならない。人々に奉仕することが神に仕えるという信念で、わが身を削り、相手がいまいちばん必要としているものを与える奉仕。その４０年間のマザー・テレサの献身に対して、ノーベル平和賞が与えられたのは当然のことであった。

《ボートピープルの救援》

会議で真剣な討議が続いているさなかに、「ベトナム難民がシンガポール港周辺に漂着している」という情報がもたらされた。ベトナム戦争が終結した直後から、小船で海外へ脱出するベトナム難民が、しだいに数を増してきていた。その「ボートピープル」と呼ばれる人たちは、南シナ海を漂流して、シンガポール、マレーシアにたどり着く。

シンガポール港には数百人のボートピープルが漂着していたが、シンガポール政府は上陸を許可しない。小さな島国であるシンガポールとしては、致し方ない処置だったかもしれない。難民の食料は底をつき。雨季が迫っていた。放っておけば、ひとたまりもなく海の藻屑となってしまうのは明らかだった。

どのような困難な政治的事情があるにせよ、目の前に死にさらされている人たちがいるのを見て、宗教者として放っておくことはできない。世界宗教者平和会議国際委員会とアジア宗教者平和会議の共同事業のかたちで、インドシナ難民救済委員会が作られ、飯坂良明・学習院大学教授が委員長になって、すぐさま救援活動を開始することを決めた。

しかし、問題は資金であった。数百人のボートピープルを救出するのには、少なくとも１２万ドルほどの資金が必要と見られた。それをどこが負担するのか。さっそく日本代表が集まり、６万ドルの拠出を決めた。それで会議の方向が一転した。日本委員会に続いて、アメリカ委員会、カナダ委員会が資金の拠出を決定した。会場では、田澤康三郎師が会議参加者全員に難民救済募金を呼びかける緊急動議を提出した。(つづく)

渉外部からのメッセージ

１月１１日、京都市成人式ボランティアに参加させて頂きました。ユース２１京都のブースでは青年部が企画した姓名鑑定を行い、１日で１００組を超える新成人の鑑定を５名の古参会員さんに見て頂きました。鑑定後、笑顔の新成人に印象に残った事を聞くと一様に親への感謝を口にしました。５名の古参会員さんは事前打ち合わせもなく同じことをお伝えされていたようです。佼成会の真髄を目の当たりにしました。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK 京都教会　FAX 075-762-2266